第２５回兵庫カブラリー

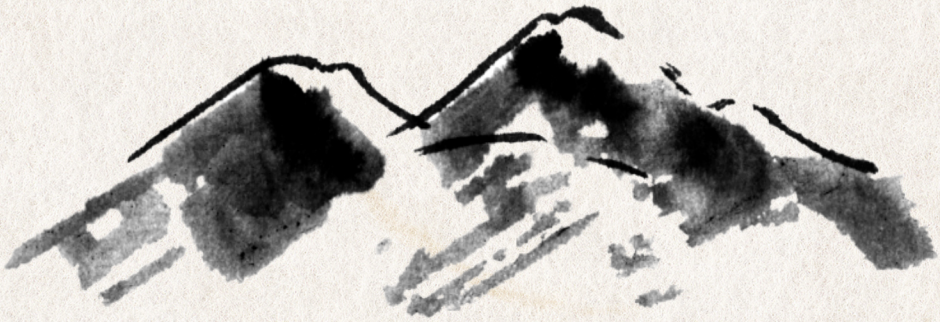
「足柄山」　～金太郎とカブスカウトのチャレンジ旅～

デンリーダーの心得

ようこそカビングの世界へ

　カブスカウト活動で大事なのは「カビング」ですが、多くの方は『「カビング」って何？』と思われるのではないでしょうか？
「カビング」はひと言で言うと「ごっこ」になります。「ごっこ」という言葉でピンと来る方もいらっしゃるかもしれませんが、実はカブスカウト隊の運営自体が「ごっこ」なのです。
　カブスカウトのバックグラウンドになっているものは、2016年に実写映画化されたラジャード・キプリングの「ジャングル・ブック」です。この物語に出てくるオオカミの群れの形態がカブスカウト隊とリンクしているので、オオカミの長（隊長）を中心としたサークルで集まる形がカブの大輪になっています。「カブ」は動物の子ども。「デン」は動物の巣。「パック」は動物の群れ（隊）を表しています。しかし、スカウト運動が日本に入ってきた際に、前述した背景が「オオカミ」であることが日本としてイメージとして良くなく、「足柄山の金太郎」の物語を流用することになったためにスカウトを年代別に「りす」「うさぎ」「しか」「くま」という表現になった経緯があります。
　カブスカウト年代はまだまだ幼稚さが残る年代です。大人への成長過程の中で、辛い事、面倒くさい事、真面目に取り組む事を避けたがる傾向がまだまだ残る年頃です。その気質から、私たち指導者を時には困らせることもあります。そこで重要なのがカビングの要素である「ごっこ」なのです。「ごっこ」は、カブスカウトの活動を楽しくさせる重要なスタイルであり、「ごっこ」の取り組み方で同じプログラムでも楽しさが全く違ってしまうと言っても過言ではありません。
　今回のカブラリーは「金太郎ごっこ」です。私たち大人も「ごっこ」に積極的に馴染み、この世界観に浸り、スカウトと一緒に楽しみましょう！

カブラリー担当　県連副コミッショナー　　富永　和也



その1 教育に繋がる勝利

　私たち成人指導者はスカウト達が大好きです。スカウト達を愛しています。ですので、「今回のカブラリーでは勝って欲しい!」「できれば一番になって欲しい!」と思うのはスゴく当然のことであり、そう思われる指導者は、とても素晴らしい指導者だと思います。こんなに愛されたスカウトは必ずいい大人に育つことになるでしょう。しかし、その愛情があるあまりに勇み足になることは避けたいものです。

　まず考えて頂きたいのは「デンリーダーはどこまでするべきなのか?」ということです。あなたが担当している組を勝たせることは簡単です。デンリーダーであるあなたが全てをやってしまえば良いのです。できれば本番のラリーゲームもやってしまえるなら完璧ですね。当然ながら大人と子どもですで、あなたのような大人が本気出せばナンバーワンになるでしょう。しかし、もちろんのことながら、それがNGであることはご存じでしょう。では、どこまですべきなのでしょうか?

　カブスカウトの組は、「組長を中心とした自治でありデンリーダーはそのお手伝いをする」という形態がスカウト達の成長に繋がる教育なのです。デンリーダーはあくまでも組長が考え、組長が決めるためのフォローをすることが重要であり、それが組長であるスカウトの成長になるのです。その為には、デンリーダーは組長に「考える」「する」ということを促すことが大事なのです。そうやって自分たちで頑張って勝利することで得られる快感が、物事に一生懸命取り組む大事さを理解する機会となるのです。親がやってしまう「夏休みの自由研究」で表彰されても子どもは心から喜べないものなのです。今回のカブラリーは、回るポイントやコースを組集会で戦略を立てて本番に臨むスタイルになっています。是非、デンリーダーであるあなたが組集会にて、組長に「考える」「する」ということを促して勝利に繋がるように戦略をたてさせてください。

その2 「がんばる機会」を奪わない

　最近の子ども達の生活環境では、親がなんでもやってしまい、「がんばらない子ども」が多くなっています。あなたの組にもそういうスカウトは多いのではないでしょうか? がんばれば自ずと結果が出ます。結果が出るから反省が生まれます。反省が生まれるから工夫に繋がります。工夫ができるからよりも素晴らしい結果が出るようになります。これが「がんばる」という効果であり、スカウト達の自尊心の向上にも繋がるのです。そういう「がんばる機会」を家庭で作れなくっている昨今こそ、私たちがやっているボーイスカウト活動でその機会を作るべきなのです。

　その1で述べました「考えさせる」「させる」という延長線上に「がんばる」というのがあります。大事なのは「簡単に手を出さない。気軽に口を出さない。」ということです。その為にあなたに必要なのは忍耐力です。スカウトに「させる」と当然ながら我々が思うように進みません。時間がかり、効率も悪く、その上できあがりが酷いときも多々あります。その状況にデンリーダーであるあなたは耐えなければならないのです。もちろん、大人が「こうしたらいいのに、ああしたらいいのに」という助言も時には必要です。しかし、それは他人が考えた方法であり、スカウトの身につく可能性は低いのです。人は、自分で体験し試行錯誤を繰り返した結果が身に染み渡り、それが技能となったり、知識となったりするのであり、他人から教わるという方法は学校の勉強と同じで、なかなか身につくものではありません。スカウト達が「がんばる機会」を提供することは教育方法としてすばらしいやり方なのです。

　カブラリーの準備である組集会。カブラリー本番。様々な場面でスカウトに指導する機会があります。その際は「これは、がんばらせる機会を奪っていないか?」を一度考えてから行動してみましょう。

その3 カブスカウトはモチベーションが命

　あなたはもう既にご存じだと思いますが、カブスカウトはスイッチが入るとちゃーんとしてくれるものです。でも逆にスイッチがはいっていないと結果は惨憺たるものです。まさにカブ(動物の子ども)であり、その年代の特性からカブスカウトと命名されているのです。良い結果に繋がるスイッチであるモチベーション(やる気)はカブスカウト活動においてはとても重要な要素です。

　では、良い結果に繋がるスイッチであるモチベーションはどうすればアップするのでしょうか? この答えを出す為には、普段の活動においてあなたがスカウト達を良く観察することが大事なのです。スカウトにさせずにデンリーダーがやってしまうという形態の問題点は前述したとおりですが、それと同じくしてスカウト達を観察する機会も少なくなってしまいます。

　ですので、活動中はスカウト達にさせながら、デンリーダーはスカウトひとりひとりを観察することが大事なのです。そうすることにより、ひとりひとりの個性が見え、個別の価値観が理解でき、いわゆるスカウトの「ツボ」が見えるようになります。この「ツボ」はモチベーションをアップさせるのに有用な情報ですが、実はどのスカウトにも見える共通点があります。それは「誉められる」ことです。人は大人、子ども関係なく様々な局面でうまくいかないことが多く、また他人との比較で心が弱くなりがちなのです。そのせいで人は自尊心が低くなり、常に小さな不安を抱えているようなものです。大人であるあなたも同じように感じる事があるかと思います。しかし、その不安を和らげてくれるのが「誉められる」ということなのです。

　カブラリーの組集会では様々な訓練や練習をすることでしょう。その際には進歩が少しでもあったり、成長が見られれば、大きく誉めてあげてください。きっとあなたのスカウトは張り切って、もっとがんばって取り組むことでしょう。

その4 他人を思いやる心を育むために

努力なく与えられることが多く、また幼いころから物や食べ物の自由選択を与えられる現代環境で育ったスカウト達。スカウトに限らず今のスカウト年代の子ども達は、この環境からか自己中心的に物事を判断しがちです。また同様に人が生きる上で重要な観察、推理という力がなかなか身についていない子ども達も多くいます。

人は他人とのコミュニケーションがうまくいかないと、相手の心情を察し自分自身が調整していく能力が本来備わるようになっています。このベースとなるのが空気を読む力である観察力と、状況から未来を予測する推理力になります。

スカウト活動にはこの力を育む環境があります。それがデン(組)なのです。組長を中心とした組は、年齢、性別、性格と様々な違いを持ったスカウト達で構成されており、そこで発生するコミュニケーション不良はスカウトひとりひとりの観察力、推理力をアップさせる機会なのです。また、そこには道徳心も必要となります。この3つが揃って他人を思いやる心に繋がり、他人から信頼される人になっていくのです。

カブラリーを組で進めるにあたり、他人を思いやる機会はたくさんあります。自分の組のスカウト、隊内の他の組のスカウト、まったく別地区から来たスカウト・・・勝つことだけを考えるのではなく、スカウト仲間を思いやる機会にできるかどうかは、デンリーダーであるあなた次第なのですね。

日本ボーイスカウト兵庫連盟

カブラリー実行委員会作成

2022年　9月　1日作成